東北復興日記 49

農業再開へ 手づくり農園

こどもと一緒の会
事務局
広畑裕子さん

震災から二年たって、いろいろな孤立や偏見が生まれてきています。新たな生活空間に心が対応できずに、心の居場所が無くなっています。将来の事を考えると、不安が増幅してしまう毎日です。

かつての南相馬は美しい自然に恵まれ、地場産業といえば農業でした。田畑の周りで子どもたちが遊んでいる、豊かな南相馬でした。稲の作付けができない三年目、多くの農家は今、ため息をついています。仮設に入居されている農家にも「もういいよ」という閉塞（へいそく）感が漂っています。その方たちが農業を再開する初めの一歩の背中を押してあげたいと思いました。

そこで、私が住む塚合第二仮設住宅と隣接する長沼仮設住宅の間にある三・五反ほどの遊休農地を、子供たちが走って遊べる広場と、野菜や花を作る農地に再生することにしました。今年四月のことです。農業のことなど何も知らない。ノウハウもない。無謀かもしれません。でも仮設に入居している女性二人でスコップを使って開墾を始めました。見かねて仮設に住んでいる方や、住民ボランティアが来て手伝ってくれるようになり、六月に「のらとも農園」が誕生しました＝写真。私も日焼けして、たくましくなりました。

続いてビニールハウスを建てました。個々人が設備投資して生産するのはリスクが高いけれど、同じハウスを皆で一緒に利用すればよいのでは。はやりの「シェア」です。

まずは花の苗を作り始めました。仮設に住んでいるプロの農家が毎日教えに来てくれるようになりました。未経験者に教える事で自分の生活を見直すきっかけになるかもしれません。

収入につながるしくみができるかどうかはわかりません。でも、こうして広場と畑ができたことで、体を動かす、人と触れあえる、一緒に農作業できる場所をつくりだすことができました。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。